

That's
the way
we

Do it
わたしたちはこうしている

特別養護老人ホーム
第2有隣ホーム・作業療法士
新田淳子

File No.003

褥瘡予防と廃用症候群予防を両立するために

立体格子型ジェルパッド を導入して

身体機能が低下した高齢者では、「褥瘡改善」のために離床時間を制限し、ベッド上での臥床時間が長くなると、廃用により体力低下が進んでしまうという問題が生じます。「褥瘡の予防・改善をしつつ、座位をとって離床し、廃用症候群を予防・改善していく方法」を試行錯誤していた私たちは、さまざまな製品を試したなかから「安全性」が高く、「多様な用途」に対応できる体圧分散用具として「立体格子型ジェルパッド」を導入し、日常ケアに活用しています。当施設での実際の取り組みを通して、ご紹介したいと思います。

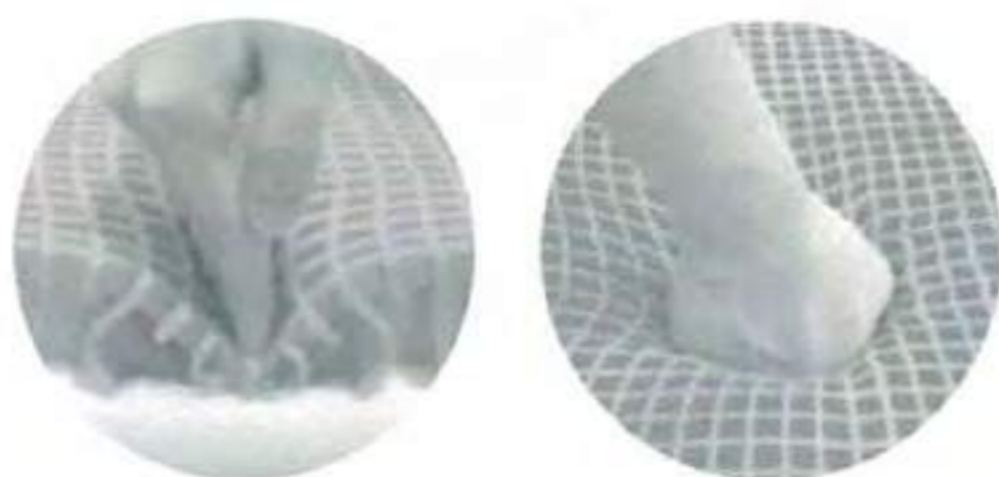
「褥瘡予防」と 「廃用症候群予防」の 両立をめざして

私の勤務する第2有隣ホームは、東京の閑静な住宅街にある定員80名(+ショートステイ10名)の介護老人福祉施設です。要介護度は平均4.3(4~5の方が8割以上)でほぼ9割は「ねたきり」

に該当する重度の方です。看護師は日勤のため、介護職が24時間体制でケアを行っています。

介護保険以前の1999年から、褥瘡ケアに予防的視点で取り組みはじめました。当時、入居者の多くは不良肢位による変形や拘縮が顕著で、車いすへの移乗も座位保持もむずかしく、それにより離床の頻度や時間が減り、廃用が進む上、褥瘡にもなりやすいという問題がありま

立体格子型ジェルパッドの構造



最近使用しているものは、改良されて強い斜め荷重にも空気層を保持できるタイプの立体格子型ジェル「ジェルトロン」で、写真はマットレスに上敷きタイプのパッドです。(製品の問い合わせは、株式会社ジェイスリープまで)

した。「褥瘡予防」とともに、「ポジショニング(良肢位保持)」による全身状態の改善をはかり、移乗時の安全について検討を行う必要がありました。

「褥瘡を予防・改善しつつ、座位をとり離床し廃用症候群を予防・改善していく」にはどうしたらいいのか。そこでまず、施設で使用している体圧分散用具やピローなどの補助用具と体位変換の方法を見直してみることにしました。当時、当施設が所有していた褥瘡ケアのための用具は、空気の入ったイカダのようなエアマットが数点、円座、ピーズ枕などでした。看護師は各種の処置に多忙で、介護職もリハビリ担当の私も褥瘡についての知識が十分ではなく、円座の問題点も知らない状態でした。

皮膚のズレが少なく ポジショニングに適した 体圧分散用具

廃用症候群の予防には、「離床がしやすい」環境づくりが重要となりますが、

これには、リスクマネジメントの視点が必要となります。取り組みを始めた当初は、褥瘡のある人に新たに購入していた高機能エアマットを利用していましたが、ベッド上の良肢位保持が取りにくく、排泄や更衣などの日常ケアなどが行いにくかったり、リハビリテーションの立場からはポジショニングがむずかしく不良肢位による可動域制限や筋緊張の亢進が問題となりました。部分的であっても自分で動ける方で、褥瘡予防のために除圧の必要な方には、エアマット以外の選択肢が必要だと痛感し、何かいい方法はないかと模索していました。そんなとき、2002年の国際福祉機器展で、当施設の介護職が立体格子型ジェルのオーバーレイ(ベッド用の上敷)タイプのパッドを見つけてきました(写真1)。

立体になった格子状のジェルパッドは通気性もよく、重ねて使うと円背の方の脊柱や、側臥位での大腿骨や腸骨、仙骨の骨突起を包み込むようにカバーすることができます。何より私たちが気に入ったのは、ベッド上でのギャッチアップの

We Do it

わたしたちはこうしている

図表 1

立体格子型ジェルパッドの使用例

ベッドマットに上敷き使用



- 仙骨、腸骨、大腿骨、脊柱の突起部分を除圧
- 背上げ機能使用時、皮膚のズレを解消

[マクラに使用]

- 後頭部の褥瘡防止
- 耳の褥瘡防止
- 酸素マスクのゴムがあたる部分の褥瘡防止

ベッド上の部分使用



[側臥位での除圧]

- 肩の部分の除圧のためカットし使用

[仰臥位での除圧]

- 足(踵・くるぶし等)の除圧
- 踵は褥瘡ができやすいので予防目的で使用

車いす座位



[ティルトリクライニング機能の車いす用]

- 背、座面、マクラ(頭部)にカットして使用

[普通型車いす用]

- 座面(仙骨・座骨)にカットして使用

この他こんな使用も

[イス用：痩せている人の座骨除圧用に、イスカバーの下に敷き込んで使用]

- 敷くまでは、臀部の皮膚剥離がたびたびみられたが現在は改善。

[装具やシーネを使用している人の、骨突起部にカットして使用]

- 以前は綿やスポンジを使用しており、完全な除圧がむずかしかったため褥瘡が発生。ジェルを使ってからは、褥瘡が発生しなくなった。

際、皮膚のズレが少ないということでした。これまでのマットレスでは、どうしても皮膚にズレが生じていたのが、立体格子型ジェルパッドの場合、ジェル自体がズレを吸収して皮膚にズレの応力負荷をかけることが少なくなり、不快感が軽減されました。取り扱いも容易で、排泄物などで汚れたときには、簡単に取り外

して洗濯できるのも使いやすい点でした。

2004年から当施設では、体圧分散機能の高いコンフォケアマットレス(パラマウントベッド)を、ほぼ全員の入居者に導入しました。この製品は、防水仕様で、失禁のときには対応しやすいのですが、発汗時の蒸れや、ギャッチアップの際に背中や仙骨部などの皮膚が持続的に

図表 2

褥瘡ケアと立体格子型ジェルパッドの利用状況
(2008年9月)

1 褥瘡の既往 ^{注1)}	36人	45%
2 褥瘡の保有(内、持込褥瘡) 2人(1)		2.5%
3 体位変換の実施	48人 定時24人 随時24人	60%
4 立体格子型ジェルパッドの利用 ^{注2)}	34人	42.5%

注1) 褥瘡の既往：施設入居前の褥瘡既往の人数+施設入居時点で褥瘡が確認された人数+施設入居後に褥瘡が発生した人数の合計。

注2) 体圧分散機能の高い、コンフォフォケアマットレスを標準装備。立体格子型ジェルパッドは、標準マットに上敷した。

引っ張られるという課題がありました。

褥瘡の原因には「圧」に加えて「ズレ」や「湿度」が知られていますが、褥瘡ケアのための体圧分散用具の多くは臥位での圧分散に焦点があてられており、ズレや蒸れについては、あまり考慮されていないのが実情です。

立体格子型ジェルパッドをコンフォケアマットレスに上敷きして使用方法は、ズレや蒸れへの対応と同時に、褥瘡予防や生活上の安全、離床のしやすさによる廃用症候群予防の点でも効果的な方法として考えられます。

立体格子型ジェルパッドは自由な大きさにカットして使用することも可能で、最近ではベッドサイドだけでなく、車いすや椅子の座面など、ベッドサイド以外のさまざまな場所でも使うようになりました(図表1参照)。

図表 3

褥瘡発生と立体格子型ジェルパッドの利用状況
(2008年9月)

利用目的	適用者	使用后発生なし	保有者
褥瘡改善			
施設で発生 ^{注1)}	16人	15人	1人
持込み	7人	6人	1人
褥瘡予防			
入居前発生	2人	2人	0人
高リスク者	9人	9人	0人
合計	34人	32人	2人

注1) 「適用者」のうち、「施設で発生」の数は、施設に入居後1度(発赤)以上の褥瘡が発生した人のなかで、「立体格子型ジェルパッドを使用した人の数(施設全体の発生数とは一致しない)。

「褥瘡予防」はできたのか?

図表2は、2008年9月時点での当施設の「褥瘡ケアと立体格子型ジェルパッドの利用状況」です。①褥瘡の既往の数字は、全入居者のなかで入居以前も含め、過去に褥瘡が発生した人数です。入居者全体のなかで4割以上の方に、褥瘡の既往がみられることがわかります。④では、ベッド上で立体格子型ジェルパッドを使用している方が全体の4割となっていますが、これ以外に、車いすや椅子などに、部分的に使用している方が14人おられます。特養という施設の性質上、対象者ごとに評価したうえで貸し出したり、長期使用の方は個人購入をお願いすることで対応しています。

利用目的には 褥瘡の改善、褥瘡の予防の2点があります。図表3は、利用目的別の利用状況をまとめたものです。

We Do it

わたしたちはこうしている

「予防」目的の使用では、入居以前に褥瘡が発生した方や、高リスクの対象者が、褥瘡の発生にいたることなく離床し、車いす上で座位をとり日常生活をおくることができていることから、褥瘡予防にとどまらず廃用症候群の予防としても効果が高いと考えています。

今後の課題 「自発的な動きの支援」としての 体圧分散用具利用

最近では、立体格子型ジェルパッドの利用は「褥瘡予防」「変形・拘縮の防止」という当初の目的から、自分で動くことがむずかしい方の「自発的な動きの支援」「動きやすい環境づくり」という目的へと変化しつつあります。立体格子型ジェルパッドは、日常ケアのなかでのポジショニング(良肢位保持)をとるうえで、使いやすい素材ですが、利用時には安全面からの評価が必要です。「ジェルترون」の素材はアメリカFDA認可の素材のため、人体に害はないということですが、利用者と利用条件については安全面からの十分な配慮と注意を要します。とくに、認知症の人に使用する場合は、ジェル部分の異食に注意が必要です。

今後の課題は、現在の取り組みが、担当するスタッフが変わったり、経験の少ない新人スタッフでも正しく実施できる

ようにすることです。そのためには、「廃用症候群」としての「褥瘡」への理解を深めること、また、早期に発見して対応をとれるよう、看護師を始め、さまざまな職種と相談しながら「教育・研修」の機会を設けることが、大切だと考えています。

また、科学的な検証については、さまざまな施設で、さまざまな適用の条件について、データを取ってみていくことも必要だと考えています。

参考文献

- 1) 東島弘子・編著：「ひやりはっと」から学ぶ福祉用具の安全活用法、中央法規出版、2002
- 2) 財テクノイド協会監修・東島弘子編：活かそう、福祉用具の「ひやりはっと」、中央法規出版、2007
- 3) 高齢者施設における褥瘡ケアガイドライン作成委員会編：高齢者介護施設の褥瘡ケアガイドライン、中央法規出版、2007

【今回紹介した製品】

ジェルترونヒーリングパッド
(オーバーレイタイプ)
ジェイスリープ株式会社
<http://www.jsleep.com>